

共産主義インタナショナル第三回大会
1921年6月22日－7月12日

〈系統的な、ねばりづよい組織活動〉

- 一 オ・ヴェ・クーシネンへの手紙と『共産
党の組織建設、党活動の方法と内容に
かんするテーゼ』草案*にたいする意見

*『共産党の組織建設にかんするテーゼ』の草案は、オ・ヴェ・クーシネンが第三回大会のために書いたもの。1921年6月6日、彼は、自分の書いた組織問題についての論文『二つの課題』の一部分とこの論文の基礎になったテーゼをレーニンに送った。レーニンの注意にもとづいて、クーシネンは、テーゼを書きなおし、6月17日、もう一度（党出版物にかんする25－29項は除いて）それをレーニンに送った。のこりは6月21日に送られた。レーニンはもう一度テーゼのこの案文を読んだらしい。6月27日、クーシネンは、レーニンの指示にしたがって書きなおしたテーゼの第三の案文をレーニンに送っている。テーゼの仕上げにはW・ケーネンもくわわった。7月9日、レーニンはテーゼを承認し、テーゼにたいする最後の意見と補足をくわえている。テーゼは小委員会で審議され、いくらか変更をくわえて採択され、7月12日、第三回大会で採択された。 事項訳注 P746

同志クーシネンへ

宛先 フィンランド共産主義者団
またはコミンテルン気付

六月十日

同志クーシネン！

あなたの論文（三章からなる）とテーゼを読んで、たいへん満足した。
テーゼについての私の意見を同封する。

つぎのようにすることをお勧めする。ドイツ語のテキスト（論文とテーゼの）を^なおし^てくれるようなドイツの同志（ほんとうのドイツ人）を一人すぐ見つけること。たぶんその同志は、あなたの頼みがあれば、第三回大会であなたの論文を報告として読みあげること^もやってくれるだろう（ドイツの代議員にとっては、ドイツ人の話すのを聞くほうが、ずっと楽だろう*）。

私は、末尾（テーゼの）を削除することをお勧めする。

宣伝と扇動については、ずっと詳しくすること――

とくに新聞雑誌について、だが口頭の宣伝についても同様に。

私の考えでは、あなたはぜひともこの大会での報告を引き受けなければならない。この件について、きょうジノヴィエフに手紙を書くことにしよう。

心からの挨拶を！ レーニン

(*）組織問題についての報告は、1921年7月10日、ドイツの共産党员W・ケーネンがおこなった。

テ ー ゼ

(第六テーゼまたは) 第六項第二節、最後の文章は、
つぎのように書かなければならない。

「……環境からある程度までこの……傾向を不可避免的に受けつぐ(*)」……

* コミンテルン第三回大会で採択された同テーゼの第六項第四節にあたる部分で、大会で採択された最終のテキストではつぎのようにになっている。「革命的労働運動も、ブルジョア的環境から、ある程度までこの形式と二元主義の傾向を不可避免的に受けつぐ」。この二元主義とは、労働官僚と人民の対立をさす。

そのつぎの文章も、こう書かなければならない。

「……共産党は、系統的な、ねばりづよい組織活動により、またくりかえして改善、訂正をくわえることによって、この傾向を克服しなければならぬ……」

(第七テーゼまたは) 第七項。

西ヨーロッパの大多数の合法党ではまさにこれが欠けていることを、もっと詳しく述べなければならぬ。党员ひとりひとりの日常的な活動(革命的な活動)が欠けているのだ。

これが主要な欠陥である。

この状態を変えること——これがいちばん困難な点である。

しかも、これがいちばん重要なことである。

第一〇項。

ずっと詳しく。

もっと細目にわたって。

実例。

新聞の役割。

普通の資本主義的新聞と比較した「われわれの」新聞。

「われわれの」新聞のための活動。

実例。1912 - 1913年のロシアの諸新聞。

ブルジョア新聞との闘争。これらの新聞の金しだいの性質や、その嘘などを暴露すること。

ビラの配布。

居住での扇動。

日曜日の遠足、その他。

ずっと、ずっと詳しく。

第一一項——これまたずっと、ずっと詳しく。

第一三項。「細胞」で報告をおこない、その報告を討議すること。

敵対的な諸団体、とくに小ブルジョア諸団体(Labour Party [労働党]、社会党、その他)について報告をおこなうこと。

未組織プロレタリアートと黄色団体に(とりわけ第二および第二半インタナショナルに)組織されたプロレタリアートの大衆、および非プロレタリア的な勤労人民諸層のあいだでの義務についてもっと詳しく。

第二六項と第二七項。

これはこのテーゼでは適當でない。

これは「組織問題」ではない。

このテーマに手をくわえて、『コムニスティツィエ・インテルナツィオナーレ』誌のための特別の一論文、たとえば『革命期の組織問題』とか、なにかそういった論文に仕上げられるほうがよい。

でなければ、『はじまろうとしている革命とそれに対応するわれわれの任務の問題によせて』（ロシアとフィンランドの経験をもとにして）とか。

1921年6月10日にドイツ語で執筆

クーシネン、オ・ヴェ（1881－1964年） 人名訳注 第42巻 P805

フィンランドおよび国際労働運動の著名な活動家、共産党およびソヴェト国家の活動家。フィンランド共産党創立者のひとり（1918年）、コミンテルンの各大会に参加（第二回大会を除く）。コミンテルン第三回大会で執行委員、1921－39年、同執行委員会書記。1940年からソ連邦最高会議代議員、カレローフィン共和国最高会議幹部会議長。1941年からソ連邦共産党中央委員。1957年から同中央委員会書記、同幹部会員。1958年、ソ連邦科学アカデミー会員。ソ連邦共産党史、国際労働運動史の諸問題について多くの著作がある。

〈革命の戦術 労働者階級の多数者の獲得〉

三 共産主義インタナショナル第三 回大会のための戦術にかんする テーゼ草案にたいする意見

ゲ・イエ・ジノヴィエフへの手紙*

問題の要点は、レーヴィが政治的には非常に多くの点で正しいということにある⁽¹⁾。残念なことに、彼には規律違反の行為がいくつかあった。このために党は彼を除名した。

(1) 1921年3月の中部ドイツにおける労働者の武装蜂起にたいして、レーヴィが右翼的な立場からくわえた批判をさす。この三月闘争は武装蜂起の客観的条件が存在せず、労働者階級にその準備がない条件のもとで、社会民主主義者のくわわったプロイセン政府によって挑発されたもので、労働者の英雄的な奮闘にもかかわらず、闘争は孤立し、労働者は重大な敗北をこうむった。

タールハイマーとベラ・クンのテーゼは、政治的にみて根本的にまちがっている。空文句と左翼主義のもてあそびだ。

ラデックは動揺しており、「左派」の子供っぽさに一連の譲歩をして、彼の原案をだいなしにしてしまった。彼の最初の「譲歩」は、このうえなく特徴的である。彼のテーゼの第一章《Wmgrenzung der Fragen》〔問題の範囲限定〕には、以前にはこう書かれていた。

「労働者階級の多数者を獲得する（共産主義の原理の味方に）こと」（注意せよ）。それがこう訂正された（verballhornt）。「労働者階級の社会的に決定的な部分を獲得すること」。

すてきだ！ この個所で、こういう文脈のなかで、労働者階級のまさに多数者を「共産主義の原理の味方に」獲得することの必要性を弱めるのは、このうえなく愚かしいことである。

権力を獲得するためには、一定の条件のもとで（とりわけ労働者階級の多数者がすでに共産主義の原理の味方に獲得されているばあい）、決定的な地点で労働者階級の社会的に決定的な部分の多数者が打撃をくわえることが必要である。

この真理を改訂し、verballhornen〔改良と称して改悪〕し、労働者階級を共産主義の原理の味方に獲得するための共産主義インタナショナルの一般的諸任務の第一章で、労働者階級の多数者を獲得する必要についての命題を弱めるということ——これは、ベラ・クン

とタールハイマーの無思慮（まったくの話、見たところちゃんとした考えのようだが、その実、筈でひっぱたいてやらなければならないしろものだ）の、……またあわてて人の言いなりになるラデックのやり方の、典型的な見本である。

ラデックのテーゼは、法外に長たらしく心棒がぬけた、政治的中心点を欠いたものだった。ところが、ラデックは、それにさらに水ましをして、めちゃめちゃにしてしまった。

どうしたらよいか？ 私にはわからない。じつに多くのものが——時間と労力が——むだにされてしまった。

もし諸君が大会の席上での公然たるたたかいをのぞまないなら、私はつぎのようにすることを提案する。

(一) きょうすぐに（諸君はぜひともきょう中に基本的な点を解決しなければならず、あとに延ばせない、とブハーリンが言っているのです。延ばしたほうがいいとは思いますが）厳密な表決にかけて、タールハイマーとベラ・クンのテーゼを、基本的にまちがったものとして根本から否決すること。このことを記録にとどめること。もし諸君がそうせず、この点で大目に見るようなことをすれば、万事がだいなしにされてしまうだろう。

(二) ラデックのはじめの草案——私がさきほど見本を一つあげておいたような訂正によって「改善された」草案ではなしに——を土台にすること。

(三) このテキストを圧縮し、それが心棒ぬきではなくなって（そういうことが可能だとして！）、実際につぎの点が明瞭に、厳密に、明確に、中心思想として重視されるようなしかたで、それに訂正をくわえる仕事を、一人ないし三人の人に委任すること。すなわち、

共産党はまだどこでも多数者（労働者階級の）を獲得してはいない。組織的指導のもとに獲得していないだけでなく、共産主義の原理の味方にも獲得していない。これがすべての根本である。唯一の合理的な戦術のこの土台を「弱める」ことは、はなはだしい無分別である。

ここからして、つぎのような結論が出てくる。ヨーロッパには可燃性の物質が充満しているのです、以上のようなものであるにもかかわらず革命的な爆発がごくまぢかにおこることもありうる。労働者階級が——例外的なばあいには——容易な勝利を得ることも、またありうる。だが、現在、そういう可能性にもとづいて共産主義インタナショナルの戦術を立てるのは、愚かなことである。宣伝の時期は終り行動の時期が始まった、などと書いたり、考えたりするのは、愚かしく、有害である。

共産主義インタナショナルの戦術は、つぎのことを基礎としなければならない。労働者階級の多数者を、なによりも第一に古い労働組合内で、うまずたゆまず、系統的に獲得してゆくこと。そうすれば、事態がどう転換しようと、われわれはかならず勝利するであろう。だが、事態がことのほか幸運な転換を示したばあいに短期間「勝利する」ことは、ばかにでもできることだ。

ここからしてつぎのような結論が出てくる。「公開状⁽¹⁾」の戦術は、どこでも、必須なものである。このことを率直に、正確に、明瞭に言わなければならない。なぜなら、「公開状」についての動揺は、きわめて有害で、きわめて恥ずべきものであり、しかも、きわめて広範囲にひろまっているからである。率直に言おう。「公開状」の戦術が必須だということ、共産主義インタナショナルの第三回大会以後一ヵ月たってもまだ理解

しない人間はみな、共産主義インタナショナルから除名すべきである。私がドイツ共産主義労働者党⁽²⁾の加入に賛成したのは誤りだったということが、私にははっきりわかった。この誤りをなるべく速やかに、なるべく完全に是正しなければならない。

(1) 1921年1月8日にドイツ統一共産党(ドイツ共産党が一時採用していた名称)が、ドイツ労働総同盟、自由職員組合行動同盟、労働者総連合、ドイツ社会民主党、ドイツ独立社会民主党、ドイツ共産主義労働者党、自由労働連盟(サンディカリスト)にあてて出した公開状のこと。この公開状は、インフレーション、失業、貧困化の増大、反動の強化を撃退するために、賃金引上げ、生計費の引下げ、反動の武装解除、政治的大赦、ストライキ禁止の撤廃、ソヴェト・ロシアとの外交・通商関係の即時樹立などの要求のもとに、すべての社会主義組織と労働組合の行動の統一を提唱したものであった。

(2) ドイツ共産主義労働者党(KAPD)

1919年のハイデルベルク大会でドイツ共産党から除名された「左派」が1920年4月に結成した党。1920年11月、ドイツの全共産主義勢力の統一をたすけ同党内のすぐれたプロレタリア分子を迎えるために、同調組織の資格で一時コミンテルンに加入を認められた。しかし、コミンテルン執行委員会は、ドイツ統一共産党をドイツの唯一の完全な権利をもつ支部と考えていた。コミンテルン加入のさい、同党は統一共産党と合同すること、統一共産党のすべての行動を支持することを条件としていた。コミンテルン第三回大会は、同党が2-3月以内に大会を招集し、統合問題を解決するよう決定した。第三回大会の名で執行委員会は、『ドイツ共産主義労働者党の党員に訴える』というアピールを出して、大会の決定を説明し、同党がセクト主義をすてて、ドイツ統一共産党と合同する必要があることを指摘した。しかし、同党指導部は第三回大会の決定を実行せず、分裂活動をつづけた。執行委員会は同党と手を切って、同党はコミンテルンの外に立つようになった。その後同党は、労働者階級のなかに支柱をもたないセクト的グループになってしまった。

ラデックのように自分の考えを散漫に述べたてるよりは、「公開状」の全文を翻訳し(またドイツ語では全文を転載し)、その意義と手本としての「公開状」そのものとを、嚙んでふくめるように説明するほうがましである。

私は、戦術についての一般的な決議をこのことにかぎりたいと思う。

そうしてこそはじめて、基本的方向が示されるであろう。中心的な思想が明瞭になるであろう。散漫さはなくなるであろう。だれでも自分の好きなものをそこから読みとる(ラデックのテーゼのように)というようなことは、不可能になるであろう。

そうすれば、ラデックの原案は約四分の一に——それ以下には言わないまでも——圧縮されるであろう。

テーゼの代わりに小冊子を書いて表決にかけるようなことは、もうやめてよいころである。こういうやり方では、われわれすべてのあいだになにも争いがないばあいにさえ、部分的な誤りは避けられない。そして、心棒がぬけていて、争いがあるときには、われわれはもっと大きな誤りにぶつかって、この仕事全体をだいなしにしてしまうだろう。

また、諸君がぜひともそうしたければ、あとがら補足を書きくわえることもできる。このような戦術を基礎とし、細目として、実例として、原理としてではなくまさに実例として、なおあれやこれやを書きくわえようではないか。

さきにすすもう。

セラティとレーヴィをひとまとめに「日和見主義」と呼ぶのは、愚かしいことである。セラティには科^{とが}がある。いったいどういう点にあるのか? 一般戦術の問題については

なく、イタリア問題⁽¹⁾について、正確に、明瞭に述べなければならない。その科は、彼が共産主義者と分裂して、改良主義者、トゥラティー派を除名しなかった点にあるのだ。イタリアの同志諸君、諸君がこのことを履行しないかぎり、諸君は共産主義インタナショナルの外にある。われわれは諸君を除名する。

(1) イタリア問題は、コミンテルン執行委員会がイタリア社会党をコミンテルンから除名し、イタリア共産党をコミンテルンの唯一のイタリア支部とみとめたことにたいして、社会党が抗議したために、コミンテルン第三回大会で審議された。

大会は、1921年6月29日、イタリア社会党についてつぎのような決定を採択した。「イタリア社会党がレッジョーエミリアの改良主義的会議の参加者と彼らの支持者とを除名しないかぎり、同党はコミンテルンに所属することはできない。

この予備的な最後通牒的要求が実行されたばあいには、第三回大会は、改良主義的および中央主義的分子を除いたイタリア社会党とイタリア共産党とが合同して、両者がコミンテルンの単一の支部になるのに必要な措置をとることを、執行委員会に委任する」。しかし、イタリア社会党は、この決定を実行しなかった。

1923年の春、イタリア社会党内には、共産党との合同を主張する左派——「第三インタナショナル派」(G・M・セラティ、F・マッフィその他)が生まれた。1924年8月、彼らは共産党と合同した。

だが、イタリアの共産主義者にたいする、まったく真剣な忠告、要求はこうである。諸君がセラティ派の労働者の多数者をねばりつよく、忍耐つよく、巧みに説得して、味方にひきつけることができないうちは、大言壮語してはならない、左翼主義を弄^{もてあそ}んではならない、と。《Fall Levi》[「レーヴィ事件」]も、一般戦術についてではなく、Märzaktion [三月行動]の評価について、ドイツ問題について、[考察されなければならない]。ブランドラーは言う。

守勢行動だったのだ、政府が挑発したのだ、と。

そうだとおこう、それが事実だとおこう。

そこからどういう結論が出てくるか？

(一) 攻勢の叫びはみな誤っていたし、愚かしいものだったということ。しかも、攻勢の叫びはさかんにあげられた。

(二) 共産主義の小要塞(共産主義者がすでに多数を得ていた中部地区)を闘争にひきこもうとのぞんだ政府の挑発があったとすれば、ゼネラル・ストライキを呼びかける戦術は誤りであったということ。

(三) 今後はこのような誤りは避けなければならない。というのは、ドイツには右翼の巧みな駆引きによって内乱で二万人もの労働者が殺されたあとなので、特別の情勢が存在するからである。

(四) 数十万の労働者(ブランドラーは、百万と言っている。うわごとではないのか? 熱に浮かされているのではないか? どうして州別、都市別の数字がないのか???)の守勢行動を「一揆」と呼ぶのは、まして「バクーニン主義的一揆」と呼ぶのは、誤りよりもっと悪い。それは、革命的規律の違反である。あまつさえレーヴィは、それにくわえてさらにこれこれの違反(正確に、きわめて慎重にそれを列挙すること)をおかしたから、処罰されたのは当然であり、除名で罰せられたのは自業自得である。

除名の期限を設けるべきである。たとえば半年というように。それがすぎたら、彼はい

ま一度復党を申請することが許される。そして、もし彼がその期間誠実にふるまうなら、共産主義インタナショナルは彼を入党させるように勧告する。

私は、ブランドラーの小冊子以外には、まだなにも読んでいない。私がここに書いていることは、レーヴィとブフンドラーの小冊子だけを抛り所にしてしているのである。ブランドラーが証明したのは——もしなにかを証明したとすれば——、ただ一つ、Märzaktion は「バクーニン主義の一揆」[こういう悪口を吐いたので、レーヴィは除名しなければならなかった]などではなくて、革命的労働者の、数十万人の、英雄的な防衛であったということである。だがそれがどれほど英雄的であるにせよ、一つの小地区だけでなく全国にわたって多数者が共産主義者の味方にならないうちは、1919年1月以来挑発によって二万人の労働者を殺した政府の挑発にのって、このような戦闘に応じるようなことが、今後あつてはならない。

（1917年7月事件は、バクーニン主義的な一揆ではなかった。そういう評価をする者があつたら、われわれは党から除名したであろう。七月事件は英雄的な攻勢であった。しかし、われわれがそこから引きだした結論はこうであった。つぎの英雄的な攻勢を、われわれは時期尚早にはおこなうまい、と。時期尚早に全面的な戦闘に応じたこと——これがMärzaktionの本質である。一揆ではなくて誤りであり、数十万人の守勢行動の英雄主義が、それを情状酌量すべきものとしているのである。）

シュメラルについて、二つか三つでもよいから、記録文書が手にはいらぬだろうか？

『コミンテルン』誌に、各国二篇ずつでも記録文書（二ないし四ページずつの）をのせても、さしつかえないだろうに。

シュメラルについてどういう事実があるのか？ シュトラッサーについては？

肝心な問題の一つを忘れてはならない。ラデックの最初のテーゼから、「待望する党」にかんする部分、それを非難している部分は、かならず全文削除すべきである。全文を抹殺すること*2。

ブルガリア、セルビア（ユーゴスラヴィア？）、チェコスロヴァキアについては、これらの国については、問題を具体的に、別個に、明瞭に、正確に提起すること。

もしこの点でわれわれの意見が一致しないようであれば、政治局を招集することを提案する。

1921年6月10日 レーニン

* コミンテルン第三回大会の戦術についてのテーゼの準備に関連して書かれたもの。テーゼの作成はロシア代表团に委任されていた。

1921年6月1日、カ・ベ・ラデックは、テーゼ草案にA・タールハイマー、ベラ・クンの提案した修正を入れたものと、後者の書いたテーゼ草案とをレーニンに送った。これを入れた封筒に、レーニンはテーゼ草案にたいする最初の意見を書きこんだが、その後本巻の意見書を書いた。

テーゼ草案は、レーニンの指摘にしたがって書きなおされ、一連の代表团との会議で審議され、ロシア代表团の名で大会に提出された。7月1日、レーニンはコミンテルンの戦術を擁護する演説をおこない、7月12日、テーゼは全員一致で採択された。

事項訳注 P747

*2 ラデックの提出したコミンテルンの戦術問題についてのテーゼの原案のつぎの個所をさしているらしい。「彼ら」（ラデックの規定する、各国共産党内の中央主義グループ）は、コミンテルンが真に革命的な大衆政党だけをつくらうとしているのを知って、コミンテルンはセクト主義におちいりかけていると大いに非を鳴らしている。ドイツの

レーヴィ派、チェコスロヴァキアのシュメラル派その他はそういう行動をとっている。これらグループの性格はまったく明白である。これは、革命を消極的に待望する政策を共産主義的な言辭と理論でおおいかくしている中央主義的グループである。シュメラル派は、チェコスロヴァキアの労働者の大多数が共産主義の立場に立っているのに、チェコスロヴァキア共産党の創立をひきのばしている」。 事項訳注 P748 - 749

ラデック、カ・ベ(1885—1939年)

人名訳注 P844

1900年代のはじめからガリチア、ポーランドおよびドイツの社会民主主義運動に参加。第一次大戦中は国際主義者だったが、中央派への動揺を示し、民族自決権問題について誤った立場をとる。1917年からポリシェヴィキ党员。十月革命後、外務人民委員部で働き、コミンテルン執行委員会書記。ロシア共産党(ボ)第8回—12回党大会で党中央委員。党のレーニンの政策に再三反対し、1918年には「共産党左派」、1923年からトロツキー反対派の積極的な活動家。1927年の第15回党大会で分派活動のために党から除名された。1929年に自分の誤りをみとめて復党したが、反党活動をやめず、1936年にふたたび除名された。

第42巻『共産主義インタナショナル第三回大会』P423~433

1921年6月10日に執筆

続きは 4-33 へ